あゆは

arubo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あゆは

【Ｎコード】
Ｎ８５３４Ｖ

【作者名】
ａｒｕｂｏ

【あらすじ】
元不良の葉（ヨウ）は、両親の離婚をきっかけに田舎に引っ越し、町の中にある大山の頂上にある奇妙な屋敷に迷い込む。
屋敷に住む神々達、使用人達からのイジメ、何もかもが謎めいた襲撃、そして野心を持つ美青年。
様々な試練に反発しながら葉は自らの運命、運命の人を知っていく。
人、神、物の怪、それぞれの思惑が絡み合い、渦巻き、反発する儚い和風ファンタジー。

以前、別のユーザー名・題名で掲載していたものを大幅に書き直したものです
更新頑張ろうと思います

感想書いてくれたら嬉しいです

平穏が欲しい（前書き）

作中に出てくる神々は仏教、神道のものをモチーフとしていますが、実際のものとは大きく異なるかもしれません。ていうか異なります。感想お願いします。

平穏が欲しい

〜1〜

地獄から逃げ延びたと思ったら、また違う地獄に放り込まれた時、人はどうなるのだろう？
死を選ぶ？　頭が狂って、ロボットのように感情もなく苦しみに堪える？　それとも抗う？
どちらにせよ痛みを伴うのだろう。
芦沢葉（アシザワヨウ）は松明の炎の光をその瞳に映し、首に突き付けられている槍の刃を軽く掴んだ。
葉は紺色のいかにも学生らしいジャージ姿だが、その周りにいる者は全員が和服という奇妙な光景だった。
場所も大きな寺らしき所で、一見葉がタイムスリップしたようだが、ここは現代の日本である。

「……離せ、なんであたしが…」

葉は自分に刃を向けている目の前の衛兵達を睨みながら低い声で言った。
すると葉の前に1人の男が現れた。
一見着物に袴で羽織りを着た中年の年頃の男だが、顔立ちが彫刻のように整っていて松明の炎で肌が橙色に照らされ、渋い美しさを増していた。

「神道派の間者が。偉そうに口がきけるなら後でゆっくり話をしようじゃないか。……連れていけ」

男は衛兵達に命令すると衛兵達は葉を捕らえて動けないよう、腕を

掴んで後ろに伸ばした。
葉は冗談じゃないと心中で叫び、隣の衛兵の向こうずねを思いっ切り蹴った。
蹴られた衛兵は悲鳴を上げてその場にうずくまった。
その隙に葉は衛兵達から逃れた。どうしてこんな所に迷い込んでしまったんだろうと心中で自分を激しく罵った。
だが今はそんな事をしている場合ではない。
葉はうずくまった衛兵の槍を拾い、すぐに男に背中を向け走り出した。
自分を捕らえようと襲い掛かって来る衛兵達へ槍を振り回しながら必死で逃げた。
しかし葉の後ろで男は自分の側に立っていた衛兵ではない者に、首で合図を送っていた。
そいつはゆっくりと葉の背後へ歩きだし、次第にスピードを速くしていった。
しかし葉はその事に全く気付かない。
生存本能が満ち溢れるその双眸には、目の前の敵しか映っていなかった。
奴は勢い良く地面を蹴った。
次の瞬間、背中に激しい痛みが襲い、葉は顔を強張らせた。男の指示を受けた奴が、葉の背中を切り付けたのだ。
葉はその場に膝をついた。
息遣いが荒く、速くなっていく。
痛みを堪えようと無意識に歯ぎしりをしていた。
背中の血が流れていくのを感じ、目眩を覚えた。
周りの観衆は殺せ殺せと奴に声援を送っている。
それに答えるように奴は葉の前に立った。
葉は奴を見上げ、獣のように睨んだ。
奴は持っている剣を振り上げた。
声援の声も興奮の色が色濃くなっていく。

「……ぅ、うわぁあぁぁあああ　！！！！！」

葉が凄まじい形相で悲鳴とも、雄叫びとも言えない叫びをあげた瞬間、剣は振り下ろされた。

～2～

葉は物心ついた時から、常に暴力と狂気の中で生きてきた。家に帰れば父が母に暴力を振るう毎日だった。
時には自分にも降り懸かる事もあった。
そして葉自身も時に異常な程、物や人に当たる事があった。
幼稚園の時は窓ガラスを割るなんて日常茶飯事。
小、中学生の時は何人を病院送りにしたか分からない。
葉も、２０人を越えるくらいで数えるのを止めてしまった。
どれもこれも全て、父の血だと葉は父を毛嫌いした。
徐々に母を守るようになり、密かに実の父に殺意を覚えるようになった。
そして不良の道に足を踏み入れ、葉にとって学業よりも喧嘩が本業のようなものになってしまった。
それと同時に孤独となっていった。
暴力的な葉を恐れ、周りの人間は葉と関係を持とうとしなかった。
それらが悪循環となり葉はある時まで不良の道を着々と進んで行った。
父と母が離婚をする、その時まで。
母の美弥子がようやく折れたのだろう。
ある夜、離婚届けに父が判を押してくれたと葉に告げた。
あの人は何も悪くない、本当はあんな乱暴な人じゃないと、聖母の

ような微笑みで告げたのだ。
その言葉をきいた途端、葉の中で何かが途切れた。
あぁ、自分は間違っていたんだと強く実感した。
一番父を恨むべき美弥子がこんな時にまで父を庇っているのに、自分はなんて事を考えていたんだろうと自分を恥じた。そして柄にもなく泣いたのを、葉は鮮明に覚えている。
それから母子家庭となった葉と美弥子は美弥子の実家のある田舎へ引っ越したのだ。
人生をやり直すために、平穏を手にするために。

～3～

葉は囁くような鶯の鳴き声で目を覚めた。
ゆっくりと瞼を開き、はぁ、と息を吐いた。
視線の先には見慣れない木製の天井があった。
ここはどこだ、早く家に帰らないと。
見慣れないものからの焦りが葉の頭を過ぎった。
ゆっくり起き上がると、自分は和室で布団に寝かされ、寝巻の着物を着せられていることに気づいた。
手当ても手厚くされている。
立ち上がろうとすると流石に背中に痛みが走り、断念した。
なぜあたしはこんな所にいるんだ　？
ズキズキと頭が痛みだし、眉間に皺を寄せた。
そうだ。田舎に引っ越してきて、学校の帰りに山に行ったら迷い込んでしまったんだ。
思い出した途端、イライラが込み上げてきて葉は拳で畳を殴った。

「…なんであたしがこんなめに…　？　…神道派ってなんだよ　？」

未だに鳴りやまない鶯の声にも苛立ち、声のする背後を怪我を気遣いながら振り向いた。

後ろには学校のサブバックと血だらけのジャージが綺麗に畳んで置かれているだけで、鳥なんて一羽もいなかった。

葉はジャージのズホンを手に取り、ポケットから何かを取り出した。

一枚の写真だった。

そこには制服姿の葉と三人の男女が映っていた。幼い頃、田舎で夏の数週間だけ過ごした時の幼馴染み達だ。

茶髪で笑顔が似合っている少年が桜河（オウガ）、小柄で黒髪のベリーショートの少女が希（ノゾミ）、仏頂面で、不健康そうに見えなくもない白い肌に黒縁メガネだが、女性のような整った顔立ちをしているのが桐彦（キリヒコ）である。

再会した四人。

幼い頃のような仲に戻るのはそう時間はかからなかった。

引っ越す前の生活を忘れさせてくれた。

葉は写真を額に当て、ため息をついた。

「目が覚めたか　？」

部屋の外から声が聞こえ、慌てて写真を布団の中に隠した。

誰　？　と言おうとした瞬間、もう隣には声の主が座っていた。

自分を捕らえろと命令した、あの男だった。

「…ここはどこなの　？」

「屋敷の中だ。汀（ミギワ）は予想以上に深手を負わせたからな、あれから丸1日寝ていた。牢獄に入れなかっただけでも有り難く思ってくれよ」

汀とは、葉を切り付けた人間の名だろう。
優しい口調だが、明らかな上から目線に葉はむかついた。

「…有り難く思うも何も、あたしはその神道派の間者って奴でもないし、ただ山に迷い込んだだけ。だから早くあたしを放せ」

「信憑性がないな。君は屋敷の衛兵を難無く倒していった。ただの女にそんな事できるはずがない。たとえ間者じゃなくとも、少しの間ここにいてもらう事になる」

男の言葉一つ一つに葉は堪忍袋の限界を感じた。
葉はサブバックを取って男に投げつけた。
サブバックは襖に当たり、ガタリと大きな音を立てた。
しかし男は一瞬で葉の背後に移動し、葉を嘲笑うような視線を向けた。
葉も男を睨んだ。
2人に少しの沈黙が流れる。

「…汀、刀を下せ」

先に沈黙を破ったのは男の方だった。
葉の首元には刃が冷たく当てられていた。
当てているのは昨夜と同じく葉に刃を向けた、汀と呼ばれる人間だった。
銀色の短髪で切れ目の女性だ。視線が刃と同じくとても冷ややかだった。
汀は男に命令されると葉を警戒しながら刃を鞘にしまった。

「申し訳ありません」

女性にしては低めの声で呟くように言った。

「あと3日は寝てなさい。座る事はできても立つ事もままならないだろう。そちらが妙な事をしない限り、命を奪う事はしない」

それだけ言うと、男は汀を連れて部屋を出て行った。
汀は一瞬だけ突き刺すような視線を葉と交わしてから男と共に去って行った。
葉は男達の足跡が遠ざかるのを確認すると写真を布団から出した。
なんであたしだけがこんなめに　！？
そんな疑問が頭の中をずっとループしていた。
一体ここはどこなのか、自分はどういう状況に置かれているのか。
それすら分からなかった。
葉は襖に突進していったサブバッグを取り、中を漁った。
運の良い事に、携帯電話があった。だが電池の残量が少ない。
とりあえず、葉は部屋の窓まで這って行き外と連絡を取る事にした。
電話帳を開き、登録してある数少ない連絡先を見て行く。
1番に選んだのは、桜河だった。
携帯の画面は圏外と表示していたが、一か八か賭けてみるしかなかった。
部屋に1つだけある小さな窓を開けた。
その瞬間、葉は唖然とした。
窓の外には無限に広がる街、いや国と呼べる景色があった。
何人もの人や動物が街を行き交うのが見えた。
遠くに広がる屋敷の中を歩く人々も。
開いた口が閉まらなかった。
葉がこの屋敷に迷い込んだ時は屋敷は確かにただの田舎にひっそりとそびえる山の頂上建っていたはずだった。
異世界へ迷い込んだ感覚、いやまさにそのとおりだった。
外と交信している携帯電話の画面は通信中としばらく表示していた。

なかなか繋がらないのでやはり駄目なのかとため息をついて通信を切ろうとした時、画面は呼び出し中と表示が変わり、途端に通話中と映った。

『もしもし　？』

探し求めていた声が聞こえ、慌てて携帯電話を耳に当てた。

「桜河…　！？」

『葉　！？　今どこにいるの　　！！？』

桜河は鼓膜を突き破るような大きい声を出した。

「桜河…　！　声が大きい…　！」

襖を気にしながら葉は桜河を叱責した。

『…ごめん』

「桜河、母さんは　？」

謝る桜河を無視して葉は続いて質問した。

『必死に葉を捜してる。だから今どこにいるの　？』

「…あたしもよく分からない。山に行ったら変な屋敷に迷い込んじゃって…、神道派って何なの　？」

最後は涙声になってしまっていた。

『変な屋敷……？　山……？』

桜河の声の表情が一瞬で変わった。
葉の危機感がさらに高まり、鼓動が速くなる。

「…桜河　？」

『葉、もう少しだけ辛抱してくれ。俺が……！』

次の瞬間、ピーッという電子音が鳴った。
携帯電話の電池が切れたのだ。
葉は電源ボタンを押して携帯電話の電源を切った。
もうこれで、外との連絡は完全に途絶えてしまった。

「……誰か、助けて」

怖くてたまらなくて、葉は人生で初めてかもしれない弱音を吐いた。
ただ平凡で平穏な毎日が欲しかっただけなのに。
葉は自分の運命というのを呪った。

屋敷

〜1〜

寝たきりの生活から、早くも3日が経っていた。
深手だった傷だが屋敷の使用人が持ってきた塗り薬のおかげか、回復の兆しを見せていた。
だが寝たきりで昼を過ごす事はなくなっても、未だ軟禁状態であった。
葉は俯いて膝を抱え、壁にもたれていた。
落ち着かせようと何度も息を吐き、眠るように目を閉じていた。
しかし遠くから足音が聞こえ、即座に顔を上げた。
カチャリカチャリという金属が揺れる音も聞こえて葉は確信した。
…あぁ、汀か。
案の定、部屋の襖を開けたのは汀だった。

「戦意も失ったか　？」

感情がこもってない無表情な声で汀が言った。
だから戦意もくそもないだろうと内心葉は呆れながら視線を逸らした。
静かに襖を閉め、汀は葉を見下すような目で見た。

「いつまでも部屋にこもっていてもあれだろう。今日からお前を女中として働かせると八部衆（ハチブシュウ）方の方で決まった」

「……は　？」

汀の言っている事が理解できず、葉は自分でも間抜けな声を出して

いる事に気がつかなかった。
八部衆　？　女中として働く　？
何をどこから整理していいのかさえ葉には分からなかった。
だが汀はそんな事お構いなしで葉に衣服を手渡した。
旅館の仲居が着るような着物だった。

「これから案内する。ついて来い」

「…おい　！」

葉は立ち上がって汀を呼び止めた。
しかしそれを無視して汀は足を進める。
葉は小さく舌打ちをして制服とサブバックを持ち、寝巻のまま部屋を出た。
廊下には誰もいなかった。しかし遠くの方で女達の声が行き交っていたから何か仕事でもしているんだろう。
何の　？
しかし汀の速すぎる歩調に合わせるのが精一杯でその疑問を訊く余裕はなかった。
汀は階段をもう1階分上り、小さな和室が延々と続くところに葉を案内した。
そこへ向かう途中も誰1人人はいなかった。
ある意味不気味だと思った。
そしてある一室の前でやっと立ち止まった。

「ここがお前の部屋だ。お前には監視員がつくから、自由どころか脱走もできないと思え」

淡々とした口調だがまるで脅しのようだった。

「……」

葉はまたも汀から視線を逸らした。
するとその先に、1人の女が立っていた。
少し茶色がかかったショートで腕組をして仁王立ちをしている。
年は葉より少し上くらい、背丈は同じくらいだろうか。
その女は口を開いた。

「御用ですか、汀さん」

「直(ナオ)か」

直と呼ばれた女はこちらへ歩み寄り組んでいた腕を解いた。

「こいつはお前に任せる、監視を怠るなよ」

それだけ言って汀はそそくさと速い歩調でどこかへ去っていった。
こいつもあの男の手先か…？
葉は無意識に相手を見定めるような視線を送っていた。直は汀が去るのを見届けてから葉に向き直った。

「そんな小動物みたいに警戒しなくても、私は汀さんみたいに背中切りつけたりしないわよ」

「誰が小動ぶ…！」

「はいはい、とりあえず寝巻じゃ働けないから部屋で着替えましょ」

葉の言葉を遮るように直は部屋の襖を開けた。

「入んな」

葉は素直に従った。
部屋の中は寝る場所を除けば押し入れと小さめのタンス１つと机が３つしかない殺風景な和室だった。
見る限り３人部屋だ。

「ここは３人部屋で、私とあんたとあともう１人いるから。その子とはまぁ、おいおい会うっしょ」

直は雨戸を開けて部屋に光を注ぐとフゥと息を吐いた。
葉は未だ直への警戒を解こうとしなかった。
葉からしてみれば直は敵の手下だ。
脳に、ここの人間は信用できないとインプットした葉には警戒を解くなんて無理な話であった。
直はその様子を見てため息をついた。

「あんな事された後だもんね。そうなるのも無理ないわ」

直は腕を組み、口をへの字にして考え込んだ。
次に何か閃いたのか拳を掌にポンッと乗せた。
そして葉に歩み寄った。

「あんた、名前と年は　？」

「…あ、芦沢、葉。……１６」

「ふ～ん。あたしは吉岡（ヨシオカ）直、２０。一応先輩女中ね。よろしく」

直は笑顔を浮かべて握手を求めた。

葉は恐る恐る手を差し出し、それを強引に直が取る形で握手を交わした。

「それにしてもあんたホントに１６　？　年の割りにはすごい大人っぽいわね。まぁ、そんな事は置いといて。着替え手伝うわ。どうせ着方分かんないでしょ　？」

そう言って直は葉の寝巻の帯に手をかけた。

「いい　！！」

しかし警戒のせいか、葉はとっさに恐怖を感じ手を振り払ってしまった。

振り払った後に葉はハッと気付いた。

敵とはいえ自ら自己紹介して自分をさらけ出してくれた人なのに、葉の心は申し訳ない気持ちになった。

「…ぁ、」

小さく声が出た。

「あぁ、いいよ　！　私もちゃんと考えてなかったね。悪い悪い」

だが妙な空気に包まれる前に直は明るく振る舞った。

「じゃぁやり方言うから、自分でやってみる　？」

にっこり笑うと直は丁寧に着物の着方を説明した。

着物なんてほとんど着たこともなく、ましてや着方なんて全くの素人の葉でも難無く着る事ができた。

もしかしたら、この人は信用できるかもしれない。
着物を着ながら葉は頭の中でそんな事を思った。

「あんた、ふもとの町でのこの屋敷の言い伝え聞いて、探検でもしに来たんだろ　？」

「…え　？」

帯を巻こうとしたら、直が突然葉に質問を投げ掛けた。
葉にはさっぱり分からなかった。

「…言い伝えって何　？」

「あれ、知らない　？　ふもとの人間だからてっきり知ってんのかと」

ふもとの町とは、葉が引っ越してきた町だろう。
しかし葉は引っ越してきたばかりで言い伝えはおろか噂話の一つも知らないのだ。

「時々いるのさ、そういうおもしろ半分で迷いこむふもとの連中が。屋敷の人間は知らないだろうけどね。気付かれないように私が昔からそういう人達の道案内をちょくちょくしてきたから。だからあんたは間者じゃないと私は信じるよ」

葉は曖昧な予想が確信に変わった気がした。
世の末のような屋敷でも、こんな人がいたと救われた思いだった。

「…ありがとう」

自然にお礼の言葉が出ていた。

「だって夕べあんたを見た時、神道派のしの字も知らないような顔してただろ　？　一瞬で確信したよ」

だから安心しな、と直はまたにっこり笑って帯をしめてくれた。
今度は拒絶はしなかった。
根拠もないし、演技かもしれないが、この人は信じられると葉の中で感じたのだ。

「よし、じゃぁ屋敷を案内するから。とりあえずあんたは女中見習いからかな」

前掛けを着ると二人は部屋を出た。
直は実に説明が上手だった。
歩きながら女中の役割、仕事のやり方を教えてくれた。
屋敷の女中は世話班、整備班、警護班等に分かれていて、それぞれの役割がある。
世話班は食事や掃除等の身辺の世話。
整備班は屋敷の保存や庭や畑の手入れ。
警護班は武器の手入れや身辺警護の役割を担っている。
直はその警護班のリーダーである。
だがあのこの屋敷や謎の男の正体、なぜこの平和社会に警護班というものが存在するのかまでは教えてくれなかった。

「…あの、どこに向かってるの　？　これ」

「帝釈天（タイシャクテン）様のところに行くの」

「帝釈天様　？」

「あんたの部屋に来てた男よ」

葉は一瞬心臓が止まったような錯覚に陥った。
あの謎の男は帝釈天というのか。
葉を捕らえるよう命令した男。葉を女中として働かせるよう命令した男でもある。
恐怖と怒りが葉の中でこみ上げていた。
拳をつくり、力余って爪が深く食い込んでいた。

「ほら、あの女よ」

「何であんな奴がここの女中になるのよ」

「ほんと、ありえない。八部衆様達は何を考えてんの　？」

遠くの方から、女達の声が聞こえた。
その声に反応して葉は反射的に足を止めた。
気がつくと、葉と直は庭の中の縁側を歩いていた。
庭には無駄なく手入れされた木々や花が華やかではないが、地味でもなく凛と咲き誇っていた。
葉もその美しさにため息をこぼしそうになった。
だが夢心地な気持ちはそんな美しい庭に立つ同年代の女中らしき３人のせいで崩れ去った。
女達は軽蔑の眼差しを葉に向けていた。

「葉　？　どうした　？？」

不審に思った直が問いかけてきたが葉はその声に答えず挑戦的な眼差しを女達に向けていた。

女達はもの怖じ一つしない葉を見て少しずつ顔に蒼白の色が見え始めていた。

「おい　！　あんたら世話班の連中だろ　！？　さっさと仕事に戻れ　！！」

葉の視線の先を見た直が口元に手を当てて女達に怒鳴った。
そのあまりの形相に女達は「すみません　！」と怯えたように謝り庭を去っていった。

「葉、行くよ。もう時間あまりないんだから」

「…うん」

葉と直も速足でその場を後にした。
葉と直が去った後、直に注意されて逃げて行ったはずの3人がまた庭に現れた。
逃げたと思わせて木の陰に隠れていたのだ。

「行った　？」

「らしいね」

「あぁ～直さん怖かった～」

「あっち、八部衆様達の屋敷の方だよね　？」

女達は変わらず葉達の進んで行った方に軽蔑の眼差しを向けていた。
そこへ、桶を持った女が近づいてきた。
滑らかな黒髪の長髪に細身の体、何より女神のような美貌を持つ女

であった。

「貴方達、そこで何をしてるの　？」

優しく語りかけるように女は3人に話しかけた。
女達はその姿を見ると、急に慌てて身なりを軽く整えだした。
まるで有名人が目の前にいるような態度だ。

「誉（ホマレ）さん　！」

「決してサボっていたわけでは　！！」

誉と呼ばれた女は戸惑う女達を手で制した。

「そんなに慌てなくていいわよ。それより何見てたの　？」

「直さんが侵入者を八部衆様の屋敷に連れてったんです」

3人の1人が誉に言った。
そこには明らかに葉への嫌味や嫌悪が混ざっている。
誉は八部衆の屋敷に視線を送った。

「そう、あの女の子が」

誉は3人に仕事に戻る様に促すと、自分はその場に残って屋敷を見続けていた。
先ほどから微動だにする事ない女神のほほ笑みを浮かべながら。

～2～

直に連れられた八部衆の屋敷の有り様に葉は絶句した。
決して金のみ作られているような豪華さではないが地味でもない。
だが何より現実では考えられないものや事が溢れていた。
なんで襖の絵が動いてるの　？
なんでこんな、…妖怪チックな小動物達が屋敷の中走り回ってるの
？？
どうなってるの　！？

「も～何ボサッとしてんの　！　止まりすぎだっつの　！！」

そんなの当たり前だろとでも言ってるような口調で直はイライラしながら振り返った。

「だって襖の絵が動いて…　！！」

「それがどうかした　！？　行くよ　！！」

え、えぇ～。
葉は口をアングリ開けてまたも絶句した。
目を擦ってもう一度襖の風に揺れている松の絵を見てから小走りに直の後を追った。

「ほら葉、この部屋だよ」

それから程なくして直はある部屋の襖を断わりもなく開けた。
さっきまでの驚愕の気持ちはどこへやら、葉の中を恐怖の感情が独占し始めた。
中に入ってみると四方が襖に囲まれている狭い部屋だった。
梵天はおろか人一人いなかった。

しかし直は「こっちだ」と言ってまた断わりもなく真正面の襖を開けた。
心の準備など全くさせない程すぐにだ。
だがまた襖に囲まれた狭い部屋だった。
葉は直が襖に手をかける度に冷や汗をかき、狭い部屋を見る度力が抜けてしまいそうになった。
しかし部屋は徐々に広くなっていた。
直はまた断わりもなく襖を開けるのかと思いきや、襖の前で土下座した。

「あんたもやるんだよ」

小声で葉にも土下座するよう促し、葉は黙って従った。

「八部衆様、直にございます。例の侵入者を連れて参りました」

「入りなさい」

忘れもしないあの謎の男、帝釈天の声が聞こえて葉は震える手に力を入れて拳を作った。
すぐに目の前の襖が開き、直が顔を上げたので葉も顔を上げた。
そして目に映った光景に、葉の目は見開かれた。
目の前には帝釈天以外に部屋の上座に七人の男女が、下座には何十人の男女が座っていた。
何よりその男女全員が、外見年齢はそれぞれだったが共通に美男美女であった。

「近くに来なさい」

帝釈天が葉に命令した。

直は小声で「行きなさい」と耳打ちした。
葉は立ち上がり、帝釈天達が座っている上座に向かって歩き出した。
部屋に入る前は帝釈天の声はすぐ近くにいるように感じられたのに、実際はすごく距離があり、何十メートルもあるように感じられた。
葉は自分の両側に座っている男女に目をやった。
捕まった４夜は、全員が着物かと思われたが、中には和風の着物ではなく中華服や現代的なカジュアルな洋服を着ている者もいた。
だが何より、全員が人間とは思えない程の美貌を持っていた。
その誰もが葉の足取りを追い、葉に注目している。
その視線が痛いほど葉に伝わっていた。
美しい者ばかりに注目されるという、誰もが夢心地だと思わずにいられないその空間が葉にとって何よりの苦痛だった。
これだけ美男美女が集まると、かえって不気味だ。
そんな事を葉が思っている事も知らず、男女達は葉に視線を送り続けた。
さっきの女達三人よりは人間らしい自制心はあるらしい。
誰一人小言を言わなかった。
葉は上座より少し離れた所に会話に困らない距離をとって座り、土下座した。
葉は上座に座る八人の男女に視線をやった。
帝釈天が中央に座っている。
上座の八人はこの部屋にいる男女の中でも特に美しい美貌を持っていた。

「名をまだ聞いていなかったな。教えてくれるか　？」

帝釈天が口を開き沈黙を破った。
葉は顔を上げて帝釈天を睨むように見た。

「……芦沢葉です」

「そうか、葉か。葉、怪我の方は大事ないか　？」

「……まぁ、おかげ様で」

「貴様、侵入者の分際で帝釈天様に生意気な口をたたくでない　！」

葉は普通に話しているつもりだったが癪に触ったのだろう。
下座に座っている男の一人が葉に怒鳴った。
バッカみたい。
葉は誰にもバレないようその男を鼻で笑った。
女子特有の集団意識を忌み嫌っていた葉は権力、崇拝を感じさせる場面も忌み嫌った。
当の梵天はハハッと笑っていた。

「まぁいいじゃないか。翌日の朝なんてまるで獣のように私を睨んでいた。これでも角が取れた方だぞ」

帝釈天が豪快だが見かけ上品そうに笑うと場にドッと笑いが起こった。

「葉、どうした　？　堅いぞ。落ち着いてくれていいんだからな」

「…すいません。一つ、聞いてもいいですか　？」

とっさに葉は帝釈天に質問した。
葉が帝釈天に聞きたい事は山ほどある。
お前は誰だ　？
ここはどこだ　？
無限に疑問が浮かび上がってきた。

「……今回、女中としてここに置いていただける事になりましたが、処刑もありえるあたしなんかの身を、どうして確保してくださったんですか　？」

さほどどうでもいい質問を恐怖のせいで、少し遠回しの言い方になってしまった。
葉はこう言いたかった。
あたしをどうするつもりだ　？　、と。

「気になるか　？」

帝釈天は不敵に笑って聞き返した。
さっきまでの優しい態度はどこへやら、その視線はあっという間に冷たくなった。
このニ重人格者が…。
葉は心の中で帝釈天を罵倒した。

「はい、とても」

葉は帝釈天の質問に即答した。
すると帝釈天の横の女性がクスッと笑って梵天に目配せした。
帝釈天はその女性を一睨みすると葉に視線を戻した。
その瞬間、葉は背中に貫くような視線を感じた。
さっきの視線なんて比べ物にならない程痛く、鋭い。
葉の鼓動は急速に速まり、回数を増していった。
目眩もする。
両側の男女を横目で見ると、全員が葉を射るように見つめていた。
ただ注目しているのではない。
まるで獲物を見つけた獣のようだった。

ここの屋敷は、

――――狂ってる。

.

別の屋敷

〜1〜

「女中頭の藤井誉（フジイホマレ）です。困った事があったら何でも言ってね」

あの部屋はいわゆる会議室のようなものだった。
葉を部屋から出させた後、男女達は何やら会議のようなものを始めていた。
その後、誉が葉を出迎えた。
誉の後ろには数人の取り巻きがいた。
しかし見るからに誉に付きまとい、従ってるだけのような奴らだということが窺えた。
だが葉は寿命が縮まった思いだった。
あの美しい男女から決して人間らしくないものを葉は感じた。
どれほど狂った人間でも出せないような狂気でもあり、人間には持てない神秘さでもある言い表せない何かを。
とにかく今の葉はほぼ放心状態だったのだ。
だから自分の上司がわざわざ挨拶に来ても葉はどうでもよかった。
適当に頭を下げて礼を言った。
しかし葉の横で直が誉に会った途端に表情を変えた。
あからさまに嫌な表情をしたのだ。
だが葉は普通に誉の事を美人で優しそうな人だと思っただけだった。

「貴方は見習いからなんでしょう　？　とりあえず、仕事教えるから着いてきてちょうだい」

誉は変わらない微笑みで葉に言った。

しかし直が横に割り込み誉を睨んだ。

「それは私が済ませました。それにこの者の監視を任されているので私に任せてください」

直属の上司である誉に直はきつく言い放った。
だが誉の微笑みは微動だにしない。

「でも女中頭としてそれは義務だし、形式としてよ。芦沢葉さん、よね。いいかしら　？」

「…はぁ」

葉は何が何なのかよく理解できなかったが、適当に返事をして誉のついていこうとした。

「ちょっと、何勝手に連れてこうとしてるんですか　！？」

ついに直が怒声を発した。
葉はびっくりして立ち止まり直を見た。
しかし誉は葉の背中を押して無理矢理連れて行った。
直の前には取り巻き達が立ちはだかり無言で直を威嚇している。
その双眸は一瞬で権力という言葉が浮かび上がらせた。

「葉　！」

取り巻き達の背中越しに直は叫んだ。
気をつけろ。
そう言っているように葉は感じた。
あんなに優しい直が必死な形相になったのに葉は違和感を覚え、誉

を見た。

「どうしちゃったんだろう、直ったら。私、そんなに怖く見える？」

誉の微笑みは動く事はなかった。

葉はその質問に答えられず視線を逸らした。

すると誉の微笑みが一層増した。

誉は屋敷から少し歩いた所にある調理場に葉を案内した。

現代的なガスや電気が通った調理場ではないため、蒔きをくべ火の番をする者もいた。

何人もの女中がせわしく動き回っており、高級食材を手際よく調理していた。

「見習いの内はここで働いてもらうわ。主に、薪割りかしらね」

「……はぁ」

葉は空に昇る煙を見上げながら小さく答えた。

「誉さん」

切り刻んだ食材を持った数人の女中達が誉に向かってお辞儀をした。

しかし葉を見るなりクスクス笑い見下すような視線を送った。

よそ者や周りと違う者への軽蔑。

挑発のようにも見えた。

「お願い」

横で誉が優しく言った。

次の瞬間、誰かが葉の背後から葉の動きを封じた。
一人だけじゃない、数人がかりだった。
見覚えがある展開に引っ越す前の記憶が一瞬で脳裏を過った。
決まってケンカに発展するパターンである。

「あんた…　！」

葉は誉を睨んだ。
誉の周りにはさっきとは違う取り巻き達が集まっていた。

「なんであんたみたいな奴と一緒に仕事やんなきゃいけないのよ？」

取り巻きの一人が葉に言い放った。

「あんたなんかすぐ死刑になれば良かったのに」

そして葉の頬を拳で殴った。
葉はとっさに歯を食いしばって痛みに堪えた。
次に刺さるように冷たい井戸水をかけられた。
誉は葉に歩み寄ると、葉の頬に手を添えた。
葉の顔を上に向かせるとまた女神の微笑みを浮かべた。

「ごめんね。……貴方、邪魔なの」

誉の声色が一瞬で変わり、葉の背筋を凍らせた。
表情もさっきからは考えられない程冷たい。
葉は一瞬腰が抜けるかと思った。
しかつかの間のの恐怖は、怒りへ徐々に姿を変えていった。
頭に血が上り、人の鎖から逃れようともがき始めた。

背中の傷なんて気にしてられなかった。

――――――やっぱりこの屋敷の人間は信用できない。

と、期待を裏切られた思いだった。

「……ぅ、うわぁ　！！　あぁぁあっ」

怒りが強すぎて上手く言葉に出せなかった。
その様を見て誉はクスッと葉を嘲笑った。

「神道の間者でもそうじゃなくても、きっとあなたはここにはいらない存在だわ。いらない物は早く捨てた方がいいでしょ　？」

「……ここの事は知らないけど、…少なくともいらないのはあんたも一緒だよ　！」

葉が放った一言に誉はカッと血が上り、葉の頬を引っ叩いた。

「…連れて行って、使用人用の井戸にでも突き落としなさい」低い声で誉は言った。
葉と取り巻き達は誉の放った一言に驚愕し、丸い目で誉を見た。

「誉さん、井戸に落としたらマズいんじゃ…」

「いいの、早くしてちょうだい」

取り巻きの声に答えた誉の声は、声調こそ穏やかだったが、その眼差しは何でも射るような鋭さだった。
質問をした取り巻きの一人は怯えてそのまま口をつぐんでしまった。

冗談じゃない。
葉はとっさに力を振り絞って最後の抵抗をした。
すると肘が取り巻きの一人の顔に当たり、片腕の鎖が外れた。
もう片方は自力で無理矢理外し、誉達から必死に逃げた。
後ろの方で取り巻き達の吠える声が聞こえたが、葉の耳には届かなかった。
ただただ自分に迫りくる〈死〉という化け物から逃げるだけだった。
誉は葉と取り巻き達の背中を微笑みながら見送った。
女神とは程遠い微笑みだった。
そんな事も知らず葉は突き当たった角を次々と曲がっていった。
足だけには自信のあった葉は取り巻き達とあっという間に距離を離していった。
神経を尖らせ、逃げ回った。
まるでホラー映画の中に放り込まれたような感覚だった。
いつ捕まるか分からない。
捕まったら殺される。
恐怖でアドレナリンが分泌され、心臓の鼓動が速くなるばかりだった。
途中でほかの使用人や神々に見つからないのが幸運であった。
やがて取り巻き達が見えなくなり、葉は走るスピードを緩めていった。
近くの塀にもたれ掛かった。
肩を上下させて息をし、頬は紅潮していた。

「…っゴホ、……ケホケホ」

葉の口から少しばかり咳が漏れたので口を押さえた。
咳が出る程激しく長時間走ったのは葉にとって久しぶりだった。

――――――あなた、邪魔なの。

誉の一言は、葉の心中を掻き回していた。
人間は怖い。
いや、あの女が怖いのかもしれない。
あの一言を誉が発した時、葉には誉が一瞬欲の塊に見えた。
最初は清楚で美しく、礼儀正しく、まさに女性らしさというものを絵に描いたような人だったが、さっきの誉はその真逆だった。
直もそうなのではと一瞬思ってしまった自分にも嫌気がさす。
息も落ち着き始め、ゆっくりと歩き始めた。
やはり自分はここでは孤独に生きるべきなのかと絶望感。

「鼠が自ら罠にかかった」

後ろから女の声がかかり、後ろを向いた途端頭激痛が走った。
追いつかれていた。
意識が朦朧とし始め、目の焦点が合わない。
そのまま腕を掴まれどこかへ連れていかれていく。
目の前には少しばかり大きな井戸があった。
そんな…、自分の墓穴を掘ってたなんて……。
もう抵抗ができなかった。
されるがままに暗く冷たい井戸水の中へ、葉は落ちていった。

〜2〜

背中の傷が疼く。
変わらず朦朧とする意識の中葉は死ぬまいと息を必死に止めた。
瞼がトロンと垂れてくる。

タイムリミットが刻々と迫り、暗闇の中で手足を動かしても体は浮上しなかった。
それでも葉は諦めず手足を動かした。
その時、何かが葉の手を掠った。
固い感触だったが、井戸の中の側壁のようにぬめりを帯びたものだった。
そちらに目をやると水の中で葉をまじまじと見つめる子供の姿があった。
その瞬間、葉は目を見張った。
死体なんかではない。目の前にいるのは確かに3、4才の子供だった。
しかも姿形が普通ではない。
手には虎のように鋭い爪があり、全身が鱗に包まれている。
あまりにも奇怪な様だった。
葉は思わず体の中に溜めていた空気を吐き出してしまい、一気に苦しくなった。
もうだめかと思った時、子供が葉の背後に回り葉の背中を軽く手で押した。
次の瞬間、肺の中に空気が流れ込み苦しさが消えた。
空の青が目の前に広がっていた。
あのひと押しで水面まで浮上したのだ。
葉はまた咳を漏らし、胸を軽く叩き深呼吸して息を整えた。
周りを見ると、そこは井戸の中ではなかった。
目の前には小さな屋敷があった。
梵天達のいる屋敷とは華やかさも程遠く、少し地味目であったが柔らかい雰囲気の屋敷だった。
葉はその屋敷の傍にある池にちょこんと浮かんでいた。
テレポート…？
葉は微弱な力で池の端に泳いでいき池から出た。
地面に立った途端力尽きて倒れた。

あの池の子がいなければ、葉は死んでいた。
ヒシヒシと誉への恨みの念が葉の中で生まれていた。
だが恨みよりも恐怖の方が大きかった。

「おい、お前。誰の許しでここで寝ている　？」

頭上で低く重みのある声が聞こえた。
また、追っ手…　？
ゆっくりと寝返りをうち、声の主を見た。
そこには着流しを着た長身の男が立っていた。
片手にはキセルを持っている。
男は煙を吐きながら葉をその鋭い目で見下ろしていた。
しかし垂れた前髪でよく顔は見えなかった。
その鋭い目だけが目立っていた。
この男が追手だとしても、葉は抵抗することを諦めきっていた。
黙ったまま男から視線を逸らした。

「死んだか　？」

男は葉の背中を軽く蹴った。
すると背中の傷に痛みが走り、葉はうめき声を漏らしてうずくまった。

「何だ、生きてるじゃねぇか」

男は飄々と言うので葉は男を睨みつけてやった。
男は葉の傍でしゃがみ、煙を吹き付けた。
葉は煙に咳込み、煙から逃れようと体を起こした。

「お前、あの噂の間者か　？」

「……違う」

「じゃぁそうなんだな」

簡単に見透かされてしまい、葉は男からまた視線を逸らした。

「誉の取り巻きにでもやられたのか　？　それで井戸から偶然この池に入っちまったと」

「…だったらなんだ　？」

「強情な奴だな。ちょっと、そこ縁側に座ってろ。着物持ってきてやる」

男は立ち上がると屋敷の中へ入っていった。

屋敷は男の物らしい。

葉は自力で少しずつ立ち上がり、ふらつきながら屋敷の縁側に辿り着いた。

縁側に座り、手で顔を覆った。

ため息ばかりが葉の口から出ていた。

指の間から池を覗くと、水面からうろこに包まれた子供がこちらを見つめていた。

もう訳が分からない…。

葉の口からまた大きなため息が出た。

「丈が合うかどうかは分からんが、とりあえずこれで我慢しろ」

男は戻ってくると葉に同じ使用人の着物と手ぬぐいを渡した。

「あの部屋で着替えるといい。着替えたらさっさと帰れよ」男は適当な部屋を指差すとキセル片手に背中を向けた。
葉は男に疑いの眼差しを向けながら指差した部屋をゆっくり足を進めた。
男はそんな葉の視線に気づいたのか、振り返った。

「誰も覗きゃしねぇよ」

あまりにも飄々と言うので葉は頭に血が上り、男を睨んで障子を思いっきり閉めた。
着物を次々と脱ぎ捨て頭を手ぬぐいで荒く拭いた。
誰が期待なんかするか…　！
眉間にシワを寄せて障子を睨むとくしゃみが出て寒気がした。
葉は肩をさすって着物を着替え、濡れた着物を畳んで部屋を出た。
慎重に男に見つからないよう周りを気にした。
あんな不作法な男は葉はもう見たくなかった。

「行くのか　？」

池の子達が目から上だけを池から出し、しゃがれた声で葉に声をかけた。
葉はその声が池の子達のものだとすぐ分かったが大して驚きはしなかった。
葉は池に歩み寄った。

「君達ってほんとは人間じゃないよね　？」

姿形から「あんた」と相手に言える訳なく、無意識に少し柔らかい表現を使った。
すると池の子はフンと葉を鼻で笑った。

「その言い方は子供扱いしてるだろ　？　僕たちはお前より何百年も生きてるし、使用人以外のここの奴らは何千年、もっと生きてる」

「お前なんてほんのガキンチョなんだよ」

偉そうな口ぶりに葉は少々腹を立てたが黙って2人の話を聞くことにした。

姿形、言動だけで質問が涌き水のように他人の心に芽生えさせる2人に。

葉は1度周りを確認してから池の端にしゃがんだ。

「…聞きたいこと、いくつかあるんだけど」

「何だ　？」

「言ってみろ、何だって知ってる」

葉は少し間を開けて考え込んでから口を開いた。

「……ここの屋敷って、一体何だ　？　なんで山のてっぺんに建ってるのに、町の人は誰も気付かない　？　」

「気になるか　？」

葉は素直に頷いた。

「あとあの梵天達は誰だ　？　普通の人間にとても見えない。そもそもあんたらもなんなの　？　もしかして妖怪　とか！？」

「あ～～　！！　もういいもういい　！！」

「…無口と思いきや予想外な小娘だな」

池の子、いや妖怪は葉の質問を手で制した。
1人がため息を吐いて呼吸を整えた。

「つまり何にも知らねぇんだな」

「じゃぁ慈悲深き僕達が教えてあげよう」

「手短に、率直に言うとな」

妖怪2人は同時に咳払いをして葉に目を向けた。

「ここは、仏教の神々が住まう屋敷」

「貪欲な人の世にたった1つだけ在る神聖な場所」

「あの屋敷に住む奴らは神聖な仏教の神さんで」

「僕達はその神々に仕えることを決めた、物の怪ってわけだ」

2人は交互に言葉を発した。
それには催眠にかけるような響きがこもっていた。
葉は耳を疑った。
非科学な情報が同時にたくさん入ってきて整理がつかない。
そして顔を見合わせると顔をニヤニヤさせながらもう1度葉を見た。

「「分かったか　？」」

葉は金魚のように口をパクパクさせて妖怪達を見た。

「……冗談やめてよ」

「嘘なんてつくか」

「僕達の姿が何よりの証拠。人間に見えるか　？」

確かに、妖怪達の姿はどう見ても人間と断言できない。
その時葉は自分の置かれている状況がどれほど危険で重いかを身をもって知った気がした。
自分が今いるのは今まで当たり前だと思ってきた常識も何もかもが通じない未知の土地、世界である。
あたしは…、なんて所に…。

「おいおい、唖然としちゃってるぜ」

「大丈夫か　？　とっとと戻らねぇとあいつまた来ちゃうぜ」

「…あっ、うん」

「あいつ」があのキセルの男だと分かった葉は急いで立ち上がった。
長居していたら間者だとまた疑われて牢に入れられてしまう。
とりあえず男の屋敷から出たかった。
道は分からなかったがとにかく門に向かって葉は走り出した。
葉が男の名前を知る、１週間のことである。

屋敷の真実

〜1〜

「誉さん。あの間者、死んだのでしょうか　？」

誉の取り巻きの1人が誉に問うた。
誉は自分達使用人の洗濯物を干し終えて空を仰いでいた。
洗濯場は屋敷の使用人棟の屋上にあり、高さは人の世のビルよりもはるかに超えていた。
ゆえに風も少し冷たかった。

「きっと…死んでないわ。あの時の井戸の底は例の神様の屋敷の池に繋がっていた。あの方に何もされてないとは限らないけど」

洗濯場の隅にいた世話班の1人の取り巻き、喜久野帷（キクノトバリ）は返事をきくと怯えたような目をして俯いた。
しかし誉の忠実な取り巻き達は誉に相づちを打って顔を見合わせ笑った。多くの取り巻きは誉の黒い貪欲な部分を見ても気に留めず、理由があってのことと頭の中で片づけていた。
しかし帷は誉が微笑む度、冷たい表情をする度、表情を変える一度一度に背筋を凍らせていた。
以前帷は誉に目をつけられ、誉の取り巻き達から執拗ないじめを受けていた。
故に帷は雰囲気から暗く無口な少女になった。
それを助けてくれたのが直であり、帷は直と同室の女中でもあった。

「誉さん」

1人の取り巻きであろう女中が誉の名を呼んだ。
取り巻きは洗濯場から見下ろせる景色の一点を指差した。
屋敷の周りには都がある。
人々が商いを行い、子供は走り回っている。
その中に異様に足が速く街を走り回っている少女がいた。
葉である。
屋敷の敷地内にいたはずが、間違って都に出ていた。

「ほら、やっぱり。…死に損いが」

「え、どこどこ　!?　どこですか、誉さん　!!?」

取り巻き達は全員木製の柵に駈け寄り葉の姿を探した。
帷は早く誉から離れたかったから早々に洗濯場を去った。
次のいじめの標的は間違いなく葉である。
予測がついた時から、帷は葉には近づかないことを誓ったのだ。
また自分も標的になったら今度こそ、自分が壊れる気がした。
帷は次は調理場を手伝いにいくため一旦自分の部屋に戻ろうと使用人棟の中庭を通った。

「おっ、帷じゃん」

「とぉばり〜」

「よっ　!」

中庭では3人の同世代の男女がいた。
作務衣を着た衛兵らしき2人の男と女中の女だった。

「鉄（マガネ）さん、雷（ライ）さん、薊（アザミ）さん」

帷は頬を緩ませ安堵の表情を見せ、3人に駆け寄った。

「また、サボってるんですか　？」

「サボってんじゃねぇよ。休憩、休憩」

本人自慢の槍を携え、鉄は欠伸をしながら答えた。
衛兵頭でもある鉄は屋敷の人間の中では飛び抜けて背が高く、筋肉に包まれた体つきをしていた。

「衛兵頭がそんなこと言っていいの　？」

その鉄をからかうような視線を向けている細身の少年は衛兵内の実力者の雷である。
からかい上手なお調子者で鉄との会話は一種の名物だ。

「ぁんだとこの野郎　？」

言ってるそばから鉄は雷の衿を掴みじゃれ合っている。
それを避けるように薊は帷の傍に駆け寄った。

「帷、今日直から誘いあってさ。今夜新入りの歓迎会やるんだって。間者のために歓迎会やるなんて、実に楽しみ」

嫌味っぽく聞こえるが、薊は薊で楽しみにしているんだろう。
しかし帷の気分は真逆である。
誓ったばかりの誓いが早くも破られてしまったからだ。

「まっ、帷にしてみれば近付きたくない相手だよね」

察してか、薊が苦笑しながらフォローをいれた。

「あいつはお人好しなんだよ。だが俺はいけ好かねぇな。たとえ信用できる奴だとしてもよ」

「でも会ってみる価値はあるかもね。なんせ滅多にない外からの人間なんだから」

「あっ、それ同感～」

帷は苦笑して3人の会話に相づちを打った。
だが内心ではため息ばかりだった。
その心情は3人もよく分かっているはずだ。
その4人のいる中庭の近くの廊下を、噂をすればと、葉が歩いていた。
葉が極度の方向音痴なのか、屋敷の通路が複雑すぎるのか分からないが、やっとのことで使用人棟の近くまで葉はたどり着いた。
やはり井戸の件は誉の葉への、はたまた直に向けての嫌がらせだったのだ。
たった1日で葉の心身は疲れ果てていた。

「酷く顔色悪いよ、大丈夫かい　？」後ろから声がし、葉は身構えてすばやく振り返った。
後ろには袴を着た青年が立っていた。
無作法な男とはまた違う男である。
少したれ目の目をしており、物腰柔らかそうな雰囲気の青年であった。
だが誉の件で教訓を得た葉はもう雰囲気で騙されはしなかった。

「そんなに身構えないでよ、別に襲ったりしない」

「…誰　？」

葉が無愛想に問うと青年はキョトンとした表情をして思い出したように笑った。

「あぁ君か、間者って。ごめんね、朝の集会には来れなくて。俺は八部衆の1人の阿修羅」

八部衆という言葉を聞いて、さらに葉の警戒は強くなった。
しかし違和感も覚えた。
集会の時には確かに八部衆は8人いたはずだ。

「集会の時は8人いたはずじゃ…」

「身代わりだよ、身代わり。俺よく集会抜け出すからさ」

よく抜け出すのは俺だけじゃないけど、と付け足して阿修羅は持っていたキセルを吸い出した。
あの男と一緒だ…。
阿修羅は煙が葉へ行かないよう注意しながら息を吐いた。
少なくとも礼儀作法はあの男より備わっているらしい。

「俺は君を敵とは見ない。立場上助けることはできないが、悪いようにもしない。興味ひかれるしね、君にね」

阿修羅は葉の頭に手を置いてニッコリと笑った。
あの美しい男女、いや（池の子達によると）神々の中では最も人間らしい血の通った笑顔だった。

葉はどうすることもできず身を縮こませた。
阿修羅は手を引っ込め、黙ったままその場から歩きだした。
そして葉が振り返った瞬間、地面や、建物の屋根や壁を蹴って高く飛んだ。
葉は一度目を擦って再度確かめた。
だが空中の阿修羅の姿は現実である。
池の子達の言葉が、現実となって目の前にやってきた気がした。
遠くで楽しそうに会話する（帷達の）声を聞きながら、その優雅な姿を目に焼き付けた。
しかし棒のように立ち尽くす葉の姿を遠くから射るような眼差しで誉が見つめていた。

～2～

直は整備班の手伝いで屋敷の中心から少し離れた裏通りの修理をしていた。
使用人達がよく使う道だがあまり丈夫ではなかったため補強に至った。
葉は建物の修理をしていた整備班の女中に聞いてなんとか直の居場所を見つけだし、そこへ向かうと直が食いつくように葉へ駆け寄ってきた。
相当心配していたらしい。必死の形相、という言葉が似合う表情をしていた。
葉は直を落ち着かせると事情を話した。

「やっぱり…　！　なんて卑怯なやり方すんのよ、誉さんは　！！」

直は壁を思い切り殴り、その衝撃で周囲をびっくりさせた。

葉はそんな直の様子を見て他人事のようにため息をついた。
不良時代の経験から慣れっこなのである。
直は突発的に葉の肩を掴み、真剣な眼差しで葉の瞳を見た。

「葉、あんなのにびくびくする必要ないからね。私がどんな手段使っても守るから」

葉は直の言葉に驚いた。
友や親友がいなかった葉は、今まで誰にもそんなこと言われたことがなかったからだ。

「…ありが、と、」

ぎこちなく返事をした。
素直に嬉しくなった。

「てか、全然気にしてなさそうだよね　？　あんた今までどんな人生歩んできたわけ　？」

葉の反応を直はからかいだして、その態度に葉はクスッと笑った。
すると直は思い出したのか、「あっ」と声を漏らした。

「今日さ、夜にあんたの歓迎会やろうと思うんだ。仲間紹介したげる。ここにいる間、困らないように」

「歓迎会…　？」

「そ。調理場から余ったまかないを少しだけくすねてね」

直は周りの整備班の女中に挨拶すると持っている金づちで軽く肩を

叩きながら歩きだした。

「まぁ、肉が出ることはあまりないけど、まかないといえど美味しいんだよ」

そう言って直は今にもよだれが垂れそうな表情をした。

なぜかは分からないが、葉は直だけは自分は疑うことはできないだろうと思った。

それからしばらくして夕方になり、世話班の女中達は神々の夕餉（ユウゲ）の支度に追われた。

警護班、整備班、衛兵はそれぞれで夕餉を済ませ、警護等の夜の仕事がある者はまた仕事を始めるのだ。

夕餉の時間、葉達の部屋にはそれぞれ多めにまかないを持ち込んできた6人がいた。6人が入るには少しきゅうきゅう詰めだったので鉄はすだれが降ろしてある窓に腰掛けていた。

葉から時計周りに直、帷、薊、雷、鉄と丸く並んでいる。

葉は隣から来る鉄の視線に身を縮こませていた。

なんなんだ、この人。今までで1番痛い視線を送ってくる人だな…。

葉は鉄と視線が合わせられなかった。

「さ　！　新入り歓迎会を始めるとしますか　！！」

「「よっしゃ〜　！！」」

双子は両手を高く上げて直に続いて歓声をあげた。

「まず自己紹介からか　？　鉄、あんた先言いなさい」

「なんで俺が…」

「できないの　？」

渋る鉄を雷はからかう眼差しで見ると鉄は眉をピクッと動かして口を開いた。

「衛兵頭、伊吹鉄（イブキマガネ）」

明らかに嫌々丸出しの自己紹介でだった。

葉は小さく苦笑いするしかなかった。

「あちゃ～、昼からこれだよ。新入りさん気にすんな。あっ、俺はね、いつもこの人にいじめられてる要田雷（カナメライ）。よろしくな」

雷は歯を出して葉に笑いかけた。

葉にも雷がお調子者だということがすぐ分かった。

「あたしは雷の双子の姉の要田薊（カナメアザミ）。二卵性だからあまり似てないけど一応こんな奴とでも双子だから」

二卵性だからかは分からないが、薊は雷とは性格が対称的でやや毒舌家であった。

「はい、帷　！」

直は帷の背中を叩くと帷は葉の方に顔を向けて控えめに笑顔を作った。

「あ…、喜久野帷（キクノトバリ）…です。よろしくお願いします」

帷の口調にはやはり怖れが出ていた。

「帷、こんな奴によろしくなんて言う必要ねぇぞ。信用できたもんじゃねぇ…」

「鉄」

葉の悪口を言う鉄を直は直視した。
まるで母のように無言の注意をした。
鉄は舌打ちすると顔を伏せてしまった。
だが葉は鉄が顔を伏せる時、ほのかに顔を赤くしていたのを確かに見た。
…ふ～ん。
他の人間は気付いていないらしく、葉は誰が大体どんな人間なのか把握できた。

「葉、自己紹介」

直が葉を催促し、急な緊張から葉は軽く座り直した。

「…芦沢葉、です。迷惑いっぱいかけると思うんですけど、…よろしくお願いします」

「よろしく～」

薊は葉の肩をバンバン叩いた。
一応歓迎しているらしい。

「なぁ、まかない食わないの　？　みんな」

雷が不満そうな声を出し、他の5人は慌てて思い出したように箸を

持った。

「…いただきます」

葉は、誰にも聞こえないくらい小さな声で挨拶し、料理に箸をつけはじめた。

料理は野菜中心の料理がほぼであとは豆類と穀物。

言うなれば精進料理だった。

食事の途中、双子は間者というレッテルを気にしないのか、色々な質問をしてきた。

外の世界はどうなのか、井戸の件は大丈夫だっのか。

井戸の件は答えられるとして、彼らの言う外の世界が葉の育った世界なのか、屋敷の外の世界なのか、葉には分からなかった。

今はそれより鉄の方が気になった。

顔が赤くなったのはもしかして…と思い、女子だからかそこがたまらなく気になったのだ。

「あ、水もう無くなりそうじゃん。ちょっと取ってくる」

なんと都合の良いことに、直は竹でできた大きめの水筒を手に部屋を出た。

「おい、芦沢」

直が出ていくなりさっきまで俯いていた鉄が口を開いた。

「俺はお前のこと、敵と見なしてるからな。変なことでもしてみろ、俺がたたきのめす」

「鉄さん、今日血の気多いよ」

「雷は黙ってろ　！」

口を挟んだ雷を鉄は叱り付けた。

「お前の目的はなんだ。直はお人好しだからっていい気になるなよ」

場の空気が一気に重くなった。

葉は箸を止めて鉄を見た。

「…信じてはもらえないかもしれないけど、あたしは仏教とか神道とか全く分からないし、なぜ食事に肉が滅多に出ない理由さえ分からない」

周りが驚いたように目を丸くした。

「…あたしは間者でもなんでもない。ただの迷子」

「…迷い人　？」

鉄は驚きのあまり葉に聞き返した。

食事で肉が禁じられているのは、殺生を禁じているからであって、浄肉と呼ばれる特別な形で肉となった動物の物しか食することができないからである。

屋敷にいる人間だったらそれは当たり前のことで、葉が神道側の間者だとしたら基礎知識としてそれくらい知っていてもおかしくないからだ。

「本当に分かんないの　？」

今度は雷が聞き返した。
だが葉は首を横に振るばかりである。

「何も分からない。説明してくれたら有り難いくらいだ」

「…そういえばあたし、見たことあるかも。葉が捕まった時と同じような服装した人達を直が道案内してるところ。決まって一定の時期だった気がする」

「だからってこいつも迷い人だと分かった訳じゃないだろ　？」

鉄は中々の頑固者らしい。
葉は拳を握りしめた。
何か納得してもらえる説明はないのか。
なんとなく葉は悔しかった。
だがすぐに解決策は浮かんだ。
あの写真……。
葉は思いつくなりすぐ立ちあがった。
そして鉄を強引に押しのけると丁度鉄の足の近くに置かれていたサブバックを取りだした。

「なんだ、その奇妙な生地のやつは　？」

雷の質問を無視して葉はバックの中を漁った。

「…あった」

葉はていねいに、端も折れていない状態で大事にしまってある写真を取りだした。
桜河達と一緒に写っている写真だ。

それを持って自分の場所に戻り、料理がのる皿を退かして写真を畳の上に叩くように置いた。

「…これならどうだ　？」

４人は写真を見るなり目を見開き写真に顔を近づけた。

「なんだこれ　？　お前が写ってるぞ！？」

１番に声をあげたのは鉄だった。
薊と帷は口をポカーンと開けて瞬きせずに写真を見つめている。
雷は箸を口でくわえて碗を持ったまま固まっている。

「…あたしはただの学生だったんだ。まぁ、そう真面目でもなかったけど。それに写ってるのは幻でも変な術でもない、事実だ」

「……まぁ、あきらかに神道派にこんな服装した奴なんていないしな」

鉄は眉間に皺を寄せて唸るように言った。

「じゃぁ認めるの　？」

薊が問うと、「仕方ないだろ」と鉄は葉の無実を認めた。

「悪かったな、きついこと言って」

鉄は頭を下げて葉に謝った。
その口調はさっきからは考えられない程優しかった。

「…別にいいんです、仕方ないことですし」

「そ、そうか。意外と優しいんだな」

「…そりゃ、衛兵頭さんは直みたいな心の優しい女を好むでしょうね」

「はぇ　！！」

葉は核心に迫る質問をすると鉄は奇声を発し危うく窓から手を滑らすところだった。
双子は大声でお腹を抱えて笑いだした。

「お前　！　なんでそのこと知って　！！」

「初対面にもばれるなんて相当じゃないかしら　？」

「うるせぇ　！！」

葉は慌てる鉄を尻目にまた箸を進めはじめた。

「…見てれば分かる」

葉はそれだけ呟いて湯飲みの水を飲み干した。
すると鉄は小さく唖然とした笑みをこぼし、膝を叩いた。

「なんだよ　！　そう危険視する必要もねぇじゃねぇか　！！　おもしれ～」

いきなりの鉄の言葉に葉は目を丸くしながらゆっくり食事を進めた。

危険視する必要もないって…、調子良すぎるだろ。
さっきまで一番疑ってたの誰だよ。

「これからは誉さんに目つけられて大変だろうけど、あたし達がついてるから安心しな」

「直もきっとそう思ってる」

あぁ、やっぱり直の言った通りいい人達なんだな…。
それから間もなく直が戻り、賑やかに歓迎会は進んだ。
みんなが楽しい気分だっただろう。
帷を除いて。

～3～

歓迎会が終わると鉄と双子はそれぞれの部屋もしくは仕事場に戻っていった。
直はまだ仕事があると仕事場に向かった。
部屋には葉と帷だけが取り残された。
空は真っ黒に染められ、部屋の中は1本のろうそくだけが照らしていた。

「……あぁっと、…よろ、しく」

葉が遠慮がちに言うと、帷はお辞儀だけして風呂の準備をしだした。
なんか、意外に感じ悪いな。

「私、…貴方を歓迎する気はないですから」

「ぇ　？」

帷の一言に葉は小さく声を漏らした。
帷は葉に背中を向けたまま続けた。

「貴方はこれから誉さんにひどいイジメを受けます。私も以前経験しました。もう貴方と関わりたくないんです。自分の身を守るためにも」

帷は振り返り、葉を睨んだ。
その双眸には恐怖とこれからの苦痛の激しさを物語っていた。
あたしはこれからこんなふうになっていくの……　？

「…私も貴方と同じ、普通の人間社会からこの屋敷に迷い込んだ人間の1人なんです」

一瞬、何言われているのか分からなかった。
葉は手の力が抜けて、思わず片づけようとしていた箸を畳に落とした。
箸と碗がぶつかる音が部屋に響いた。
その音が、葉と帷の距離を立ち切っているように思えた。

「ここの使用人には2種類の人間がいます。小さい頃、外の世界から連れてこられる人達と屋敷の外の都から連れてこられる人がいます。外の世界から来た人達は、屋敷でそれまでの記憶を消されます。でも消えない人間もいます。直ちゃんも、鉄さんも、雷さんも薊さんも記憶はないけど元はこの世界の人間じゃありません。だからみんな色んな欲の的にさらされて危険なんです」

「…帷…ちゃん…　？」

「貴方1人で他人を巻き込まないで下さい　！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8534v/

あゆは

2011年11月7日10時03分発行